

復興屋台村で被災地に心の復興を

有限会社「北のグルメ都市」代表

中居雅博（六一歳）

新幹線八戸開通を契機に開業し、地域振興の先導役となった屋台村「みろく横丁」。代表の中居氏は自らも震災の影響を受けながら、気仙沼の復興屋台村実現のために奔走した。

八戸市中心街の三日町と六日町を結ぶ横丁として、地名にちなんだ屋台村「みろく横丁」を立ち上げたのは、平成十四年十一月。翌十二月に東北新幹線八戸駅開業を控え、エコステーションを設置した全国初の環境対応型屋台村で観光客をもてなしながら、中心街活性化や情報発信を図るという取り組みだ。

手頃な値段で八戸のうまいものを楽しめるこの屋台村は、お陰様でオープン以来毎年売り上げを伸ばしている。

みろく横丁の成功をきっかけに、全国各地の商店街などから講演を頼まれるようになり、

県外の屋台村開業もサポートしてきた。

宮城県気仙沼市でも、集客力向上を図る商店街や飲食店組合の店主達に招かれ、平成二十一年から二度の講演を行った。

そして、三月十一日の大震災。気仙沼は津波で壊滅的な被害を受け、多くの人命が犠牲となった。

震災から一ヶ月後、気仙沼の講演で知り合ったメンバーから「復興が進まないので知恵を貸してほしい」という電話がかかってきた。地元の飲食店主らはその頃、同じような悩みと葛藤を抱えていた。土地があるし、地元を離れたくない。この土地で商売をしたい。かといって全く手付かずの瓦礫の山の中で新しい店舗を構えるのは、お金もかかる。お客が来るのか不安もあるし、一步が踏み出せない。けれども、何もしないでいる訳にもいかない。仕事をしたい…。

彼らの想いや課題を聞き、何とか支援したいと思った私は、まず現状を把握するために、

五月に気仙沼の市長や議員などから話を伺う機会を作ってもらった。その際に、国が仮設住宅を作るという情報を聞き、仮設住宅を並べて被災者の店舗としたら屋台村を作れるのではないかと考えたのである。

私は気仙沼訪問の初日、早速現地を回り、その日のうちに屋台村の場所を決定した。それは中心街ではなく、海のそばの約五百坪の駐車場。中心街は復旧が手付かずの状態で、瓦礫の撤去に時間がかかることは目に見えていた。復興は時間との勝負と考えたので、あえて海に見える駐車場を選んだ。万が一津波が来ても、駐車場裏手の山に五分以内で避難できる。何よりも、観光客には屋台村で地元の名物を味わうのみならず、現地を見ながら被災者である店主の話聞いてもらうことにより、より深く震災を感じてほしい、そして全国からより多くの人に来てほしいという思いがあった。それこそが被災地への復興支援になる、と。

幸い気仙沼市が三年間、地権者から借り上げて無償で貸与してくれていることになった。

国に対しては、人が住まなくても仮設の飲食店が認められるかという問題があったが、店舗には全て被災者が入るということで最終的に了解を得ることができた。こうした行政の支援により、土地は市から無償貸与、建物は仮設住宅で賄うというシステムが実現した。

さらに、厨房、扉、カウンターなどの設備は出店者の自己負担とするのが一般的だが、私が青森県のガバナーを勤めているライオンズクラブが、今回の震災に対して世界中から集まった義捐金により、気仙沼の屋台村の設備分を負担してくれることになった。

これらにより、出店者は屋台のレンタル料さえ払えば、土地・建物・設備について全くリスクを背負うことなく、それこそ包丁一本で商売を始めることができることになった。

六月下旬、関係者や出店希望者を集めて説明会を開催した。復興屋台村の仕組みはリス

クなしで出店できることのほか、各店舗が必ず地元の郷土料理や名物を出すこと、三年契約であることなど。三年区切りは屋台村マニユアルのルールでもあるが、三年もすれば中心街の街並み復旧や区画整理が進むだろうと見込んだうえ、その頃には各店舗が自立して街中に店を構えることにより、街の復興を支えてほしいという思いがあつた。気仙沼の人々にとっては、震災を乗り越えて頑張ろうという気持ちを支える、新たな目標となつた。

屋台村で重要なことは、開業するだけではなく、継続していくこと。そのため、出店希望者には面接を実施して出店者を厳選する。屋台村の成功は店主一人一人にかかっているからだ。気仙沼でも例によって出店希望者の面接を行ったのだが、それはこれまで手がけた他の屋台村の面接とは全く違っていた。対象者は全員被災者であり、妻や子ども、夫などが目の前で流され、「自分はたまたま生き残った」と感じている人も少なくない。涙なし

には聞くことができず、殆ど面接にはならなかった。

最終的に二十店舗の出店が決まり、予定では八月開業だったが国との調整に時間がかかり、復興屋台村は十一月にオープンした。

気仙沼の取り組みは同じ被災地からも注目された。実は六月の出店者説明会に、私は他の被災地にも声をかけて来てもらったのである。その結果、行政とライオンズクラブの支援によりリスクなしに出店できるという気仙沼方式で、十二月には大船渡に、明けて平成二十四年には釜石と陸前高田にも屋台村が開業する運びとなった。気仙沼という見本が一つできたので、後発組はよりスムーズに復興屋台村を実現することができる。

気仙沼に続き、短期間で更に三箇所被災地屋台村実現をサポートしたわけだが、大変だったのはハードよりもソフト、つまり人材育成だった。以前は「他店は関係ない」と考えていた飲食店主達に、屋台村のノウハウと

合わせて、屋台村を共同体と考えて支え合い、共同体として市の復興にどんな役割を果たしていくかという方向に意識改革するため、私は何度も気仙沼を訪れては、出店者を集めて研修を行った。

ところで、他県の復興屋台村実現に奔走していた間、私が運営するみろく横丁に震災の影響はなかったのかというと、そんなことはない。地震当日は休業したものの、みろく横丁は翌日からろうそくを灯して開業した。しかし決定的なダメージとなったのは、むしろ四月上旬の二度目の全県的停電である。これで一気に自粛ムードが広がり、その影響は一、三ヶ月続いた。物流が原発のある福島を経由して来るため、風評被害によって滞ってしまっただけでも大きな影響を与えた。

このような状況にあって、みろく横丁では三月中から屋台村に募金箱を設置し義捐金を集めた。苦しい中でも予定していた企画は全部実施し、中心街でもイベントを催して集客

に努めた結果、お客がお釣りを入れるなどして協力してくれた義損金は六〇万円。みろく横丁はそれを地元八戸市に寄付した。さらに気仙沼の復興屋台村に対しても義捐金を募り、二〇万円を寄付した。

震災後も「また来たくなるおもてなし」を続けてきたみろく横丁では、夏場以降で前年以上に売り上げを伸ばし、九年連続の右肩上がりを達成した。

今、気仙沼の復興屋台村では、復興を目指して「また来たくなるおもてなし」に努力している。心の傷は決して癒えていない。それでも笑顔で頑張る店主達の姿に、「大したものだ」としみじみ思う。悲慘を通り超えて、働きたいと意欲を奮い立たせる店主達。全員が成功してほしいと、強く願っている。

復興屋台村支援活動は全て手弁当で行ってきた。

やりがいのあるボランティアである。

（文責 鈴木日登美）